JAA通信

（Japan Autonomous Academy）

日本自治 ACADEMY 会報誌

Vol.10　2015年6月発行

（ホームページアドレス）

http://japan-a-academy.jp/

［発行］

NPO法人　日本自治ACADEMY

北海道下川町西町88番地2(株)谷組内

郵便番号　098-1205

Tel:01655-4-2595

Fax:01655-4-2596

E-mail:info@japan-a-academy.jp

Contents

P1　**巻頭写真**

「トロッコ列車」（美深町）

P2　**会員セミナー開催概要**

P2　開催概要

P3　講演要旨　＜講師＞ 福島 健司さん

P6　**フォーラム「アジアと北海道のつきあい方 パートⅦ」開催概要**

「つなげよう、台湾と北海道の経済と文化！」

P6　講演要旨　＜講師＞ 陳 桎宏さん

P9　パネル討論要旨

＜ﾊﾟﾈﾘｽﾄ＞ 南 望さん

＜ﾊﾟﾈﾘｽﾄ＞ 阿部 晃士さん

＜ﾊﾟﾈﾘｽﾄ＞ 金安 潤子さん

＜ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ＞ 後藤 規之さん

P14　**日本自治 ACADEMY 事業紹介**

知って得する自治用語手帳の制作

トロッコ列車（美深町） 1985 年（昭和 60 年）に廃止された旧国鉄の美幸線跡地で、今トロッコ列車が運行され国内、海外から多くの方が訪れています。白樺や木々のトンネルをくぐり、渓谷の合間や野原を風を切って走るエンジン付きのトロッコ。往復 10 キロで所要時間は約 40 分。普通自動車免許があれば自ら運転することもできます。

会員セミナー開催概要

日本自治 ACADEMY では、会員間の交流拡大や今後の ACADEMY 事業の推進を図るため、2014 年 10 月 24 日、札幌市内で、会員セミナーを開催しました。参加者は、講師を含めて十数名。今回のセミナーでは、第 1 部に「講演」、第 2 部に「留学生とのディスカッション」、そして、その後、懇親交流会を行いました。

第 1 部の講演では、（株）地域計画センター開発経済部長の福島健司さんから、「北海道の農家組織の海外貢献」というテーマで、アジアを始め、世界の発展途上国で展開している農業指導や組織育成などについて、約 1 時間、お話をしていただきました（講演要旨については次ページに掲載しております）。

【講演者の福島健司さん】

第 2 部の留学生とのディスカッションでは、まず、Ng Yin Cin（ン・イン・チン）さんからマレーシアの生活や文化、日本との違いなどについて、ユーモアを交え説明をしていただきました。

次に、Patna Patriana（パトナ・パトリアーナ）さんからは、インドネシアの地理や、経済情勢などについて、通訳の Xu Ling（徐 玲～ジョ・レイ）さん（中国）を通じて、詳細な数値を用いて説明していただきました。

その後、会員の千葉さんのコーディネートで、

【スライドを使って説明するン・イン・チンさん】

ディスカッションを行いました。北海道を訪れることになった動機や、自国との生活の違い、北海道の魅力など幅広く語っていただきました。

午後 6 時に始まったセミナー、終了後に行われた懇親交流会と合わせ、3 時間 30 分の時間を要して全ての日程を終えました。

今回のセミナーでは日本農業が、世界の国々に大きく寄与していることも理解することができ、またマレーシアやインドネシアの事情を知る良い機会になったところです。

会員間、そして講演者、留学生の方々との交流の輪も広がり、本当に、実りの多いセミナーとなりました。セミナー開催にご協力いただいたみなさんどうもありがとうございました。

【左からン・イン・チンさん、パトナ・パトリアーナさん、ジョ・レイさん、千葉さん】

講演要旨

福　島　健　司　さん
（㈱地域計画センター　開発経済部長）

ﾌﾟﾛﾌｨｰﾙ（札幌市出身）
□職歴：外務省（ﾐｬﾝﾏｰ大使館）、会計検査院（農林水産省担当）、北海道開発局（土地改良管理室）、JICA農民参加型用水管理ｺｰｽ・ﾘｰﾀﾞｰ
□得意分野：ｿｰｼｬﾙ・ｷｬﾋﾟﾀﾙ、土地改良区、住民参加型水路管理組織
□趣味：英語力を生かした国際交流

『北海道の農家組織（土地改良区）の海外貢献』
～人と水が共に生きる農業が培ったノウハウをラオスに～

はじめに

福島でございます。よろしくお願いします。きょうは、私が最近行っている北海道が培ってきた灌漑農業のノウハウをラオスなど東南アジア地域へ移転するという取組を中心に、みなさんにお話したいと思っております。

まず、その取組を進めるきっかけとなったのは、去年（2013 年 9 月）、札幌市で開催された土地改良大会でした。土地改良大会というのは土地改良に携わる全国の方が集まります。集まるみなさんは北海道の土地改良に関心が高かったことから、その大会の中で、土地改良区の国際貢献に関する国際シンポジウムを開催しようということになったわけです。

シンポジウムにはアフリカから 8 か国、アジアからはラオス、ベトナム、カンボジアの 3 か国の方に参加していただき、ここで、「農業の発展に寄与するため、世界の農家と技術者が互いに協力しあって、貴重な資源である水を有効に活用するノウハウを共有し、農家主体の農業用水の管理強化を図っていく」という宣言を採択しました。今後海外で北海道のノウハウを積極的に活用するということになったわけです。

農業用水施設

ここで、海外の話をする前に、日本の農業用水施設について触れておきます。いわゆる灌漑農業と呼ばれている部分がありまして、灌漑農業とは人工の施設によって運ばれる水を使う農業のことです。人工の施設にはダムですとか、頭首工など大きなものから、田んぼの水路など小さなものまであります。これは自然保水ではなくて、人間が水をどこからか持ってきて使うというものです。

農業用水施設は、このように大きな施設から小さな施設まであるわけですが、大きな施設は農家が作れませんから行政が作る、小さな施設も一人ではできませんから、人が集まって作るということになります。

そうしますと、そこには、政治力とか費用とかが常につきまといます。また、時の為政者とか経済主体との関係も生まれてくるという特徴も持っています。その時に、費用の負担をどうするかとか、作った人間と使う人間が違うとか様々な問題が生じてきます。

また、維持管理の面では、昔の施設も近代的施設でも、個人でやるよりは集団を作ってやらざるを得ません。そうしますと費用も分担できて安くすみますが、ここで上下流という問題が出てきます。水は上から流れますので、当然上の人が有利です。特に近代的施設では、ダムから一気に流れますから、その利害関係は複雑でして、水源という意味での川の上下関係など、施設規模が膨らむほど、問題が大きくなるといえます。こうしたことが、農業用水施設が持っている特徴といえます。

この農業用水の維持管理というのが、日本の文化の原点といわれることがよくあります。水管理によってルールを作り、人間関係を調整するということで、日本人の関係を作り上げた原点となっているという見解です。また、そこには水争いというものがありまして、この利害関係を調整するためのいろんなノウハウを自ら作り上げてまいりました。

実際、水争いは利害関係を調整する人間にとっては死活問題になるわけで、上流の人から水を分けてもらわなければならない時に、どういうことをしたらいいかなど様々なルールを作っていきます。これが最終的には日本文化となるわけですが、この利害関係をどのように調整していくか、そこにノウハウがあります。

開発途上国への援助

ここで、また海外の話に戻りますが、開発途上国の灌漑用水の担当者が何を課題としてあげているかというと、農家が維持管理に関心がなく、その結果、農業発展が阻害されているということです。管理するにはどうしたらいいかということが求められてるわけです。

日本も黙って見ていたわけではなく、一応海外援助の中で取り組んではきました。最初の頃は開発型でして、農地を作ったり、ダムを作ったりしてきました。しかし、農業用水施設は管理しなければなりませんから、そのノウハウがなければ全然施設が動きません。黙っていれば上下流の利害関係が出てくるし、費用分担のルールがなければ争いが生じて動かなくなってしまうということになります。

では欧米諸国は何をやってきたかといいますと、建設後の維持管理も視野に入れた援助を行ってきました。つまり、建設の段階から農家が参加する参加型用水管理を前提とした援助を行ってきたわけです。しかし、この参加型の用水管理については、欧米では行われておらず、日本とネパールに限られています。ここで日本の役割が出てきます。

この参加型というのは、農家が全部やるわけではなく、為政者がいて、そして農家がいて、協調しながらやるというのが基本となっています。施設は為政者が全部作ってもいいわけですし、管理も全部やってもいいわけですが、そうしますと利害調整がうまくいかないので、ある部分は農家に任せたいということになります。

この参加型の形態も、政府の関与の強い方式もあれば、水利権も農家がもってすべてやるというようにいろいろなバリエーションがあります。日本では為政者が灌漑施設の建設にはからみますが、農家が自主的な管理をする農家主導型の自主管理の組織になっています。日本には何百年も前から参加型組織が存在していたわけです。

灌漑施設維持管理組織の構造

日本の灌漑施設維持管理組織の構造についてみてみますと、水源というのが一番上にあって、下の方に末端水路があって、この末端部分の組織が村の中にあるということになっています。昔から村という集落単位で組織ができていまして、その集落の中でルールができて、うまく利害調整が行われてきましたので、日本の土地改良区の多くはその歴史的過程から集落と一体となっているものが多くなっています。すなわち、用水施設は農家組織ではなく、集落が管理しているということです。

しかし、北海道の場合だけは、ちょっと違った特徴があります。北海道の土地改良区は、北海道土功組合を基礎としています。他の地域とは歴史が違います。その結果どういうことが起きているかというと、北海道の土地改良区というのは管理だけではなくて工事もやっているところが多い、農家組織が自ら作る、自ら事業をやっているということです。府県の土地改良区は維持管理だけの組織です。施設は藩が作ってくれたものをずっと守っているわけです。

もう一つの特徴は、北海道は維持管理の末端組織が集落単位ではないということです。北海道は入植から入っていますから、もともと集落というのはないんです。したがって、どういうことが起きているかというと、行政が人為的な区域を定めて組織ができているということになるんです。これが、北海道の方式が世界に貢献できるひとつの理由だと思っています。先ほどからお話ししてきた日本のノウハウがその文化に基づくものであれば、日本の文化を教えるということになってしまいます。海外に行って、日本の文化を使いなさいといってもそれは困るわけで

す。文化と関係なくうまくやっているものは伝えていけるわけです。そのノウハウを持っているのは北海道の土地改良ということになります。

北海道では、当初、灌漑にお金がかかるので、水田を作ってはダメで、畑作をやっていた方がいいとずっといわれていたようです。実際は、水田農業は土地が繰り返し使えるということもあって自然と米の方にいきました。米を作ると灌漑施設が必要です。その灌漑施設は、北海道では農家が資金を調達して自分で作らなければならない、それが土功組合です。その結果、民間主導で、集落による社会的ルールに変わる経済原則をベースにした建設と維持管理の両方を担う農家の組織体制が確立されました。

そこで、北海道で参加型研修事業というのを行うこととなり、北海道の土地改良区のノウハウの海外展開がはじまっていくわけです。直近の3年間（2011～2013年）の実施状況をみますと、短期（1～2日の視察見学）、長期（1週間以上）を合わせて、岩見沢土地改良区では108人、当別土地改良区では71人、主となって行っている大雪土地改良区では85人、諸外国から受け入れています。1か月以上連続して研修を受ける方も相当数にのぼっています。

アジアの灌漑農業

アジアの灌漑農業についてですが、アジア地域には雨季と乾季がある地域とその区別がない地域がありまして、雨季・乾季がある地域は雨季に稲作が行われ、雨季乾季の区別がない地域では畑作が行われてきました。モンスーン地帯は雨季があるので灌漑施設は必要ありません。また雨季乾季の区別がないところは十分に水があるわけです。わざわざ水をもってきて物を作るというのは、人口が落ち着いている中ではあまり必要ない。土地には十分生産力があるわけです。しかし、農業をより発展させようとすると、外から水をもってきて新たに農業生産を始めなければならない。戦後においては、そういう段階にだんだんなってきたということです。そして、生産性向上のために、各国が灌漑施設の整備を要求するようになってきて、ODA（政府開発援助）が出てくることになります。

乾季には水の制約があるので、雨季と同じ使い方をしたら水がなくなります。そうするとどうしても水を分け合うということが必要になってきます。そこではじめて先ほどからお話ししている利害調整というのが出てきます。いずれにしても、そのノウハウの根拠となるのは、公平と協調、共同というコンセプトをどうやって浸透させていくかということになります。また、アジアでは乾季農業があり、そこには、これまでのシステムがあったわけですので、この古いシステムと近代化システムの違いにも配慮していくことが必要となります。

ラオスへの支援事業

ここでラオスの話になりますが、2013年北海道で開かれた土地改良大会で、ラオスから、北海道で培ってきた灌漑農業のノウハウを JICA の取組などを通じて、ラオスの農業スタッフに継続的な指導支援を行ってほしいという協力要請があったわけです。

ラオスの人口は北海道と同じくらいで、約600万人です。多民族国家で北部、中部、南部の3つの区域から構成されています。ラオス語というのはタイ人から言わせればタイ語の方言だそうです。ラオス人は違うと言っていますが。ラオスはかってフランス領でして、フランス人はメコン川をさかのぼって、カンボジア、ラオスへと入ってきました。中国と国境を接していますので、中国資本も入ってきています。タイとメコン川を境に盛んに交流しているので関係は密接です。日本とも1955年に国交を樹立し、友好的な関係にあります。

灌漑農業の水源は全部メコン川です。メコン川の周辺に灌漑施設が集中しています。ラオスは水が豊富なので、水力発電をして、その電気をタイに売っています。

ラオスの灌漑システムの整備は、米を自給するという国の政策によって推進されてきました。ダムやため池、堤防、ポンプ場、堰などで、特に

ポンプ場は電気が豊富なのでたくさん作られております。ラオスの農業地帯は世界の他の国の農業地帯と全く変わりません。私など日本人が活躍できる理由はそこにあります。ポンプで水を汲み上げ、幹線水路に流し、支給水路を使って農地に水を配るという基本的な灌漑システムがラオスにはできています。

ラオスへの支援に際しては、JICA の草の根事業を使っています。草の根事業というのは民間が提案して JICA と委託契約を結んで行う事業です。2,500～5,000 万円くらいの事業です。やっているところはビエンチャン近郊のタソモール村というところで対象戸数は 300 戸です。

タソモール村は 1975 年に日本の援助で 1ha の田んぼを作った地域です。日本でもまだ 3 反田んぼの時期で、この時期にこの大きな田んぼを作りました。しかし、機械を使わないラオスの農家には、その広さが活用できなかったこと、その間に施設の老朽化が進み、農家に維持管理の経験がないために管理粗放化し、結果水田農業の発展が停滞していました。ですから、今の北海道の農業技術を入れてうまくやってほしいというのが背景にありました。

現地では、水門がないので水が流れっぱなしであるとか、上流では水があふれているのに下流まで水がいかないとかという状況になっています。それを直していきましょうということで、我々が今やっているのは、農家レベルのいろいろな技術をきちんと伝えてあげて、それから組織をきちんと作ってあげて、組織を活動できるようにしてあげて、灌漑技術のトータルを移転しようということです。

この事業の課題は、外国でやることですので、申請から許可が出るまで、時間と手間がかかることです。また、そもそも自分たちは自分が食べれるお米を作れればいいんであって、なぜあくせくして働くんだというように、我々と意識のズレが出てくることです。

おわりに

最後になりますが、こういった支援事業や、これまで道内で行ってきた研修事業などを通して、取組に協力してくれている土地改良区の人たちが、外国と農業について、その共通性と類似性というものを非常に理解してくれるようになりました。中には、いっそのこと、アジア地域に行って、作って、そして日本に持ってくるとか、中国やアフリカに本道で作ったものを輸出しようかという人も出てきています。今政府は中小企業を盛んに応援していますが、農家も会社を作ると、それを使って海外へ出ていけるわけです。

取り組んだ事業からは様々な副次的効果が生まれてきていることを大変嬉しく思っているところでございます。これで私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

◆　◆　◆

フォーラム「アジアと北海道のつきあい方パートⅦ」開催内容

日本自治 ACADEMY とグリーンシード21では、アジア地域との結びつきをより深めるため、2008 年から毎年、フォーラム『アジアと北海道のつきあい方』を開催しております。今回は、台湾からの来道者数が年間 40 万人に達し、今後ともその増加が期待されていることから、台北駐日経済文化代表処札幌分処のご協力をいただき、台湾と関わりの深い皆様をお招きし、2 月 12 日に札幌市内で開催しました。

講演要旨

陳　桎宏　さん
（台北駐日経済文化代表処
札幌分処　処長）

「台湾と北海道の経済・文化交流」

みなさん、こんばんは。ご紹介にあずかりまし

た台北駐日経済文化代表処処長の陳桎宏でございます。きょうはみなさんと台湾と北海道との経済文化をテーマとしてお話しさせていただくことを本当に光栄に存じます。

【台湾と北海道の交流について語る陳処長】

プロフィール

台湾淡江大学を卒業後、慶応大学大学院などで日本の政治や法律、文化などの研究を行い、1984年から外交部〈外務省〉に勤務。その後、東京、大阪、沖縄などで15年あまり、外交業務に従事。2013年8月から札幌分処 処長となり、台湾と北海道の一層の交流促進を図っている。

北海道を訪れた台湾人の観光客はもう40万人を超えました。札幌分処は6年前に開設されましたがその時は年間20万人でしたので、今はその倍になっています。これは台湾と北海道の絆がより緊密になったしるしでございます。

1895年から50年間は植民地時代でしたが、北海道と台湾は親しい関係にありました。その時代、北海道農学校出身の方々が台湾の農業発展に非常に貢献しました。

はじめにお話しするのが、磯永吉さんです。「台湾蓬莱米の父」といわれました。なぜ台湾蓬莱米なのか。その時代の台湾の在来のお米はパサパサでおいしくなかったんです。磯永吉さんは台湾で品種改良を行いました。在来のお米を蓬莱米に品種改良したのです。農業発祥地である嘉南平原にとっては本当にいいことで、はじめてお米を海外に輸出できましたし、たくさんの外貨も獲得しました。

今、台湾の有名な酒というと紹興酒です。紹興酒は世界的に有名です。その原料は蓬莱米です。北海道のおかげで作られたんです。

また、私が台湾の高雄で仕事をした時に、台南の知事に表敬にいきました。その時、知事は、八田與一さんの話をしてくださいました。八田與一さんはダム建設に尽力してくれた方です。ダムがなければ農業の発展は無理です。農業にとっては灌漑による水の確保が大事なんです。八田與一さんは「台湾嘉南平原の父」といわれました。

もう一人は、李登輝総統が称賛した人です。その方は新渡戸稲造です。台湾では「糖業の父」ともいわれていますが、ご存じのように日本の武士道精神の主唱者で、その精神は台湾にも根付きました。3，4か月前に台湾の国会が占拠される事件が起きましたが、撤退する時は非常に秩序あるもので、李登輝総統は、その行動は武士道精神によるものだと評しました。

武士道精神は、日本のメリットであり美徳です。その中身は、仁義礼智信や潔白性、責任感、おもてなし、また相手を考えて接待するとか対応するとかということだと思います。2020年のオリンピックの開催権を取ったのも、英語でスピーチした首相をはじめ関係者のおもてなしの精神があったからこそです。この武士道精神は李登輝総統が非常に称賛しております。

台湾と北海道は、この50年間の基礎の上に立って交流が進展してきておりますが、日本全体を考えると、2009年に就任した馬総統は日本との関係を重視して、特別なパートナーシップを築くこととし、双方の経済や文化交流、貿易、青少年交流の進展に取り組んでおります。治安面でも、私が勤務した沖縄は海岸線がとても長いので、密輸船なども多く、台湾と日本で緊密な情報交換が行われております。こうして現在では各分野における交流が非常に活発化してきております。

経済面につきましては、台湾にとって日本は第 2 位の貿易パートナーです。日本にとって台湾は第 4 位です。去年、日台貿易総額は 623 億ドルに達しました。世界全体で台湾に投資したのは日本が 1 番です。173 億ドルです。このように経済関係は非常に緊密になっています。台湾は今、製造業の規模も非常に大きくなりまして、多くの台湾の優良企業が日本で成功を収めています。

この 3 年あまりで、日本との各種経済協議も促進されておりまして、たとえば、台日投資協議や電子商取引、鉄道交流、海上航空機の捜査救難、薬物規制、金融監督会議など、いろんな覚書とか取り決めに調印して、経済協力が着実に進んでおります。

また、領海の関係では 16 年間未解決の懸案がありましたので、領海の問題はやはり互いに平和的に対応するという観点から、馬総統が東シナ海平和イニシアチブを提案しました。安倍首相にも前向きに答えていただきまして、去年の 4 月に日台漁業協議が締結されました。どの国も 200 海里を主張しますので、これにより、漁船が自由に平和的に操業できるようになりました。

今、努力しているのは、台湾と日本の両国間の経済連携協定や二重課税回避などの租税条約に調印できるようにすることです。そのほか、環太平洋連携協定 (TPP) への参加についても日本の支持を期待しております。

そして、ご存じのように、台湾、中国大陸は長年の政治的対立があるんですが、お互いの経済を発展させるためには外交手段を使って、経済関係について話し合わなければなりません。それで、ECFA（エクファ）、両岸経済協力協定ですね。これを締結しました。政治は後にして、まず経済の面で協力し合おうというものです。これにより、関税の優遇措置など貿易の規制緩和が行われました。

日本の企業と台湾の企業が協力して一緒に進出する場合も優遇措置が受けられます。日本企業には品質重視の姿勢や高い開発能力があり、台湾企業は商機を察するタイミングや中国大陸への深い理解があります。日本のシンクタンクの調査では、日本企業の単独での中国大陸への進出の成功率は 65%ぐらい、一方、台湾企業の協力を得て一緒に進出する場合の成功率は 80%近いという結果も出ています。お互いに協力しあうことが大切ではないでしょうか。

観光面につきましては、去年、日本を訪れた外国人観光客は 1,300 万人近いです。台湾からは 283 万人です。台湾から北海道へは、去年 42 万人でしたが、円安の追い風もあって、今年は 45 万人を超えると思います。もちろん、円安のメリットだけではなくて、北海道内では様々な取組が行われています。

私は着任してから北海道各地域に日台親善協会を立ち上げまして、そして連合会も立ち上げました。日台親善協会は民間組織ですが、行政機構もその活動をサポートしています。一例をあげますと、去年 10 月から 12 月まで、各地域の親善協会の方々が台湾を訪れて、北海道のアピールを行いましたが、日高の親善協会では、町長と一緒に行きまして、昆布の調理の仕方なども披露しています。十勝では長芋が有名ですが、ほかにもユリ根やアスパラなど北海道には農産品がたくさんあり、親善協会の方々は熱心にアピールを行いました。

それから、申し上げておかなければならないのは、国と国の信頼関係についてです。日本の観光客が台湾で必ず行くのは故宮博物館です。その所蔵品の数は 60 万点で、3 か月に 1 回展示が入れ替えられます。日本の国会議員の助けがあって、「海外美術品公開促進法」が成立したことから、日本で故宮博物館の美術品が展示できるようになりました。

去年 6 月から 9 月、10 月～12 月に、東京と福岡の博物館で、その美術品の展示が行われました。以前、ヨーロッパでも展示されたことはありますが、日本に展示されたものはヨーロッパでも展示されておりません。故宮博物館の所蔵品で有名なのは、「翠玉白菜」です。これも日本で

展示されまして、全部で約 100 万人の見学者が訪れました。国と国との信頼関係がなければこのような中華文物の海外展示はできません。また、来年には台湾南部の台南市に故宮博物館の分館が開設されますので、ここで日本の古美術品も展示される予定です。

青少年の文化交流は年々盛んになってきております。きょう在籍しているパネリストの金安さんがリードするキッズロケットとの皆さんとの交流も実現しておりますし、先日新聞でも報道されたんですが、台湾の小学生と東川町の小学生との音楽交流、東川町の小学校で、台湾側が楽器を演奏し、東川町の小学生が合唱しました。私は大変感動しました。

台湾の若い人たちは日本文化に憧れています。若い親日家の人たちを「哈日族（はんにちぞく）」とも呼んでいます。札幌の雪まつりなどは台湾のテレビを通じて大々的に紹介さています。台湾から北海道を訪れる観光客はこれからどんどん増えるでしょう。

話したいことはたくさんございます。時間ですので最後になりますが、私は北海道と台湾はこれからもっと青少年交流が盛んになってほしいと思います。私たちの年代はよく理解しあえていますが、若い人たちは一歩踏み出さないとどう付き合っていったらいいかわからないんです。修学旅行などで、日本から台湾を訪れた高校生は 2 万人です。それはシンガポールに次いで 2 番目です。私は次の世代の人たちを積極的に交流させていきたいと思います。この場をお借りして皆さんにも是非お力添えをいただきたい。

青少年の交流が進んでいくことを願って最後のお話とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

パネル討論要旨

後藤　本日のフォーラムは「つなげよう、台湾と北海道の経済と文化」をテーマとして開催しておりまして、パネリストには、北海道日台親善協会連合会（事務局長）の南望さん、JTB 北海道（札幌法人事業部長）の阿部晃士さん、釧路子どもミュージカルキッズロケット（代表）の金安潤子さんのお三方にお願いいたしております。

【パネリスト、コーディネーターの皆さん】

私はコーディネーターをつとめさせていただく後藤でございます。北海道経済部観光局で国際観光担当の参事をしております。

〔討論の前に、後藤さんから、北海道と台湾との交流内容（台湾からの観光客入込状況・国際旅客便運航状況・日台親善協会設立状況・台湾における北海道キャンペーンの実施状況・台湾への道内企業進出状況など）について説明があった。〕

パネリストの方々には、はじめに自己紹介をしていただきます。それから、今回のフォーラムのテーマである「つなげよう、台湾と北海道の経済と文化」に即して、これまでの取組やその成果、今後に向けての課題などをお話しいただきまして、これからの台湾と北海道の交流の可能性について議論を深めていきたいと考えております。それでは、南さん、阿部さん、金安さんの順にお願いいたします。

南　北海道日台親善協会連合会で事務局をしております南です。よろしくお願いいたします。北海道日台親善協会連合会の紹介をさせていただきますが、連合会は平成 25 年 10 月に設立し

ました。現在、道内の各地域で設立された日台親善協会の連合体として 16 団体が加盟しています。今後、北広島と名寄などで協会設立の動きがありますので加盟の働きかけを行っております。

連合会の設立の趣旨は台湾との民間レベルでの親善と友好交流を促進することです。昨年 10 月には連合会設立の 1 周年記念ということで台湾を訪問しましたが、ちょうど建国記念日を祝う国慶節の時期でもあったため、世界各国の要人が出席した迎賓館での晩餐会へ参加させていただくなど大変貴重な経験をさせていただきました。

また、連合会が主催した晩餐会には日本でいえば国会議長にあたる王金平立法院長にお忙しいところご出席いただきました。王金平さんには東日本大震災で台湾から北海道への観光客が減少した時期に、北海道は安全な観光先であるということを台湾の皆さんにアピールしていただき、300 名の方を帯同して北海道にきていただきました。その後、現在まで、右肩上がりに台湾からの来道者数は増え続けています。

連合会としては、今後各地域の親善協会との情報交換を密にして活動を進めていきたいと考えております。親善協会の会員の方は議員や一般企業の方、観光業界、報道関係者、個人と様々ですが、会員入会の一番の理由は、「台湾が大好き」ということです。私が所属している札幌日台親善協会の会員数は 186 名で、連合会全体としての会員数は 1,500 名を超えているかと思います。民間の任意団体ではありますが、力を結集すれば大きな力となって台湾との友好交流をより良くする一助になると確信しているところでございます。

阿部 JTB 北海道のコミュニケーション営業部の阿部と申します。よろしくお願いいたします。まず台湾という切り口ではなく、当社 JTB の話からはじめさせていただきます。

従来、JTB は旅行の総合デパートというように呼ばれていましたが、最近では様々な事業を意欲的に展開しております。簡単に申しますと、人と人との交流に基軸をおいて、地域の経済、文化の発展に貢献するという使命をもって全社をあげて取り組んでおります。

地域を取り巻く環境は非常に厳しく、特に人口の面では、北海道は 2030 年には約 100 万人減少すると見込まれています。

国の観光戦略では、人口減少による経済の落ち込みを旅行消費で補っていけないかということなどが議論されておりますことから、定住人口 1 人当たりの年間消費の減少額を外国人旅行者では 7 人分の消費額、国内旅行ですと宿泊客で 24 人分、また日帰り客では 79 人分で賄えるという分析を私たちの方では行っております。

北海道は、食、雪、景観など素晴らしい要素がたくさんあり、昨年は 145 万人の方が海外から訪れました。そのうち台湾からは 45 万人です。これはすごい人数ですが、そのうちの 2/3 の 100 万人が札幌に宿泊しています。札幌市内は宿泊が取れない状況になっています。しかし、他の地域ではまだまだ余裕があります

JTB では、各都道府県のプロモーションをさせていただいたり、またマラソン大会の運営を行うなど、人と人との交流を進める取組を進めておりますが、今後、北海道においても、交流人口をどのように増やしていったらよいか、そのためには地域としては何をしていかなければならないかなどについての提案させていただくとともに、他の企業の皆さんとも協力しながら、新しい北海道の魅力を外に向けて発信していきたいと考えております。

金安 釧路子どもミュージカルキッズロケットの金安でございます。よろしくお願いいたします。キッズロケットは 1997 年に発足しまして、ミュージカルの定期公演やコンサート、地域の各種イベントへの出演など地域の文化向上を目的に活動を行っております。

私からは子どもの文化交流についてお話をさ

せていただきます。キッズロケットは台湾の宜蘭（イーラン）県で毎年行われております「国際児童芸術祭」へ参加することとなりました。そのきっかけとなったのは、2011年、台湾建国100年という節目の年に、釧路市生まれのタンチョウが台湾の動物園へ贈られることになり、その際、釧路市長が宜蘭を訪れ県知事と懇談し、実現の運びとなったものです。

はじめての参加の際はとても不安でしたが、スタッフの皆さんの素晴らしい心遣いでその時の経験はとても素晴らしいものでした。子どもたちからは、また参加したいとの声が上がりましたので、昨年（2014年）再び参加をしてきました。

フェスティバル（芸術祭）には、19か国から40団体、日本からは3団体が参加しました。ステージ公演では40分間のプログラムをこなします。傘踊りやアイヌの衣裳を着ての舞踊、日本のアニメソングのステージなどを台湾の猛暑の中で披露しましたが、会場の皆さんからの大きな拍手と声援で乗り切ることができました。ステージ発表以外でも多くの行事があり、中学校を訪れた際には、地元の中学生に傘踊りの体験もしていただきました。

また、釧路市長の親書を携えての宜欄政府への表敬訪問や、夜市などの観光、フェスティバル参加の皆さんとの交流会などで、子どもたちは大変楽しく、そして貴重な時間を過ごすことができました。

子どもたちは、日本で味わったことのない熱い声援に支えられ、実力以上の力を発揮できたことと思います。子どもたちの成長とともに台湾への思いは大きくなっていくに違いない。キッズロケットは今後とも小さな親善大使として、お互いの友好促進に向け活動してまいります。

後藤　ありがとうございました。それでは、次に皆さんからただいまお話をうかがった部分の具体的な成果などを含めて、引き続きお話を進めていきたいと考えています。

阿部さんには旅行会社の立場からアジアの観光について、金安さんには今お話しいただいた部分で非常に感動したことや具体的な成果などについて、南さんには日台親善協会連合会の取組のこれまでの成果や今後の役割などについてお話ししていただければと思っております。阿部さんからお願いいたします。

阿部　昨年12月に北海道ドリームゲームショーという企画をさせていただきました。これはJTBが主体的にやっているものではなく、行政、民間、大学、銀行で構成する実行委員会を立ち上げて取り組んだものです。これは何かというと、皆さんご存知かと思いますが、高校生が出演し、クイズ形式で番組を進めて、日本各地の予選会を通過してアメリカに行き、クイズをしながらアメリカを横断するという「アメリカ横断ウルトラクイズ」の逆バージョンです。

インターネットや携帯の時代になっている今日、北海道の魅力を発信していくには、映像を活用することが大事になっています。1997年HTBの台湾での「ジェット TV 北海道アワー」の放映、小樽と神戸を舞台にした「ラブレター」という映画の韓国でのヒット、2008年に中国大陸で大ヒットした道東などを舞台にした中国映画「非誠勿擾」（フェイチェン・ウーラオ）により、海外から北海道を訪れる観光客が飛躍的に増加しました。北海道の魅力を映像化することにより、ガイドブックでは知りえない情報を提供でき、YouTubeなどでも閲覧が可能となります。

この企画では、台湾、タイ、ベトナム、シンガポール、インドネシアの5か国で予選会を行いました。日本語の予選会です。クイズは30問出しました。回答も漢字、日本語です。5か国で300人くらいの応募がありまして、そして予選を通過した各国2名の方に北海道へお越しいただきました。

北海道では8日間、7都市（函館、留寿都、帯広、釧路、網走、旭川、札幌）を巡り、クイズなどをしながら8日間のロケを行いました。

函館では朝市でクイズを行いました。ルスツでは雪上で、また帯広では、ばんえい競馬場でばん馬に乗ってどこの国が優勝するか競いました。阿寒湖では皆でアイヌ舞踊を踊ったり、網走では流氷館で水に濡らしたタオルを凍らせたりして楽しみました。網走監獄では、監獄の中を走り回ってクイズをしましたし、旭川では地元の方と触れ合いながら、与えられたラーメンのどんぶりからお店を探すというゲームをし、最後はオリンピック選手が練習している大倉山シャンツェでのクイズでした。

この模様は、2 月 22 日と 3 月 29 日に HTB で見られます。海外では 3 月中旬から 6 月くらいの間で台湾、シンガポール、ベトナム、中国、カンボジア、ペルー、インドネシア、ハワイ、タイの 9 か国で放映されます。9 億 5 千万人の方が視聴可能となっています。

また、若者の海外旅行離れということがいわれていますので、HBC と共同で深夜帯に北海道から海外旅行に行こうという番組を作って放映しています。シンガポール、マレーシア、タイ、台湾、フィリピンなどを対象としています。北海道から海外へ行く旅行者が少ない現状にあるので、こうした海外の映像を通して、アジアを知っていただき、若い方にはもっと海外に行ってもらいたいたいと考えています。

JTB だけではできませんが、行政並びに様々な企業の方とコラボレーションしながら、このような新しい企画に取り組んでいるところでございます。

金安　キッズロケットの台湾とのこれまでの交流の成果についてお話しします。昨年のフェスティバルに参加した際には、やはり文化や音楽は全世界共通だなと改めて感じたところです。それに触れている子どもたちが見事に溶けあっている、その場面を見ることですごく感動しました。

話は遡りますが、一昨年には、台湾の合唱団の方が釧路にやってきて一緒にジョイントコンサートを行いました。大人の方の合唱団で、子どもたちもかわいがってもらって、言葉がわからなくても一緒に歌っているという微笑ましい状況でした。小さい時から外国の文化に触れることはとても素晴らしいことだと思いました。

また、昨年の 6 月に釧路市議会で、日台友好促進議員連盟が発足しました。私も市議会議員ですが、その記念式典に、札幌分処の陳処長にお越しいただき、その席でキッズロケットのパフォーマンスも披露させていただきました。

宜蘭県のロータリークラブの方も、昨年、釧路を訪問されましたが、その時にも歓迎のパフォーマンスをさせていただいております。

小さな活動ですが、それが少しずつ広がってきております。子どもたち自身は台湾との交流の一翼を担っているということを実感していないと思いますが、大人になった時に、自分たちのつくった架け橋は素晴らしいものだと気づくことと思います。

今後も子どもたちが台湾との友好促進に向けてがんばってくれることを願っています。そしてこれからの成果にも期待していきたいと思います。

南　連合会については、設立して間もないことから、活動経過について先ほどご説明したとおりですので、私が所属している札幌日台親善協会の活動についてお話ししたいと思います。

札幌の協会は 2011 年 6 月の設立で、3 年 8 か月になりました。協会として協賛や後援を行っている取組についてご説明します。

まず、札幌市内でのイベントでは、「すすきの氷の祭典」での台湾旅行が当たる抽選会の実施や、台湾で大人気となったタンチョウの唄「サルルンカムイ（湿原の神）」を歌っている真氣（Maki）さんの札幌でのライブなどの後援を行っております。台北市立交響楽団や、台北青少年弦楽団の札幌での演奏会の後援も行っております。

また、札幌開成高校から台湾の大学で英語に

よる発表会をするので、協会に支援願いたいとの要請がありましたので、台湾の留学生にお手伝いをお願いし、開成高校内で予行演習を行いました。

さらに、協会主催事業としては、台湾の留学生をできるだけ多く招き、陳処長も得意なボーリング大会を開催したほか、女性会員が参加する行事として台湾茶を楽しむ会などを企画しております。年 2 回開く会員同士の親睦会には日本ハムの陽岱鋼（よう だいかん）選手にも出席していただきました。

協会主催の旅行も毎年行っており、李登輝元総統のところにお邪魔してお話を伺ったり、通常のパック旅行では訪れることのない八田與一さんが作られたダムなども見学に行ったりしております。

協会の会員の皆さんは仕事をお持ちでお忙しいですが、今後、その活動がより活発化するようがんばっていきたいと思っているところです。

後藤　ありがとうございました。それでは、時間も残り少なくなってきましたので、お三方から、今後に向けての課題や抱負などについてお話をいただければと思っております。金安さんからお願いします。

金安　台湾との交流で釧路市のことを考えましたら、台湾に行った時に、北海道のことは知っているけど釧路は知らない、北海道と釧路の差がわからないとよくいわれました。北海道は好きだけど、北海道イコール札幌みたいなものですね。

釧路に去年まであった直行便もなくなりましたので、海外からの観光客が道東までくることが難しくなっています。バスも少ない、費用的にも折り合わないという現状になっています。どうやって多くの方に釧路まできてもらうかが最大の課題です。

タンチョウヅルが大自然を飛び回っているというような情報も適切に伝わっていませんので、とにかく釧路からの発信が足りないんだろうと思っております。フェイスブックが大変普及してきていることから、これを上手に使おうと気づきましたので、これからは、観光情報のほかに、一般市民が食べているものとか、見ているものなど身近な生活情報をどんどん流していきたいと考えています。

また、中国語を話す人が圧倒的に少ないので、十分なおもてなしができない状況にあります。行政には、中国語をはじめいろんな国からの人に対応できるように、外国語を話せる人を増やしていく施策に取り組んでもらいたいと思っております。

阿部　金安さんからお話しのあったように、一極集中から地方に分散し、北海道イコール札幌ではない状況にしていかなければならないと思っています。

そのためには、やはり来てもらうだけではなく、私たちが行ってきちっと北海道各地の魅力を伝えるとともに、特に北海道の強みである食などについて、もっと知ってもらうことが必要です。今、道内各地のお酒などをアジアに紹介していくプロジェクトを強力に進めていきたいと思っているところです。

また、北海道に来ている留学生についてですが、今は 2,700 人です。全国では 13 万人ですので 2%に過ぎません。海外から日本に来ている旅行者は全国で 1,400 万人、北海道は 145 万人ですので全国の 10%を占めています。

私は、留学生も 10%来るような北海道にしたいと思っています。北海道で学んでから母国に戻るのではなく、北海道の企業が受け入れ、住んで、結婚して、そして母国との経済や文化交流の担い手となる。こうしたグローバルな人材を北海道で育てることが必要だと思っています。

JTB では、今年の春から北大と提携して留学生を毎年 1 名ずつ正社員として受け入れることとしました。これからの子どもたちのために、北海道をどうしていったらいいか皆さんと一緒に

考えていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

南　今後の課題としては、まず、北海道の観光予算を増大してほしいということです。現在は都道府県で 20 番目です。せめてベストテンを目指してほしいと考えています。

そして、外国人観光客を意識した体制づくりやまちづくりに取り組んでほしいということです。外国語の表記もまだまだ整備されておりません。ススキノに行って、食べものを注文しようとしてもなんだかよくわからないという人が非常に多いということを聞いております。

また、安全面も重要です。最近レンタカーで冬の道内をまわる外国の方が増えてきており、痛ましい事故も発生しておりますので、雪道の運転指導などについても取り組んでいただきたいと思います。

それから、台湾の方は、リピーターが多くなっていますので、北海道にロングスティをしていただくようなことにも取り組んでいく必要があると考えております。

今、台湾からの観光客は右肩上がりに増えてきていますが、5 年後、10 年後も本当に増え続けているかどうかということも考えていかなければならないと思っています。

後藤　ありがとうございます。皆さんから提起された課題につきましては、予算の問題とか、受け入れ体制の問題でありますとか多岐にわたっております。

行政として努力はしておりますが、行政だけで解決はできませんので、地域の皆さんを含め連携しながら、ひとつひとつスピード感をもって取り組んでいくことが必要と考えています。

まさに、今日ご出演いただいている皆さんと協力、連携を図っていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

これで、パネル討論を終了させていただきます。パネリストの皆さん並びにフォーラムにご参加の皆さんどうもありがとうございました。

◆　◆　◆

日本自治 ACADEMY 事業紹介

知って得する自治用語手帳の制作

日本自治 ACADEMY とグリーンシード 21 では、2011 年から知って得する自治用語手帳の制作・編集に着手し、これまで、Vol.1「財政編」、Vol.2「福祉編」、Vol.3「再生可能エネルギー編」の 3 巻を発行してまいりました。

昨年からは、武田　義さん（行政書士事務所　環境）、柴田真年さん（北海道環境財団専務理事）のご協力をいただきまして、Vol.4「廃棄物・リサイクル編」の制作に取り組み、このたび完成の運びとなりました。

今回の用語手帳では、廃棄物・リサイクルに関する基礎知識となる用語を中心に編集しております。A6 版のはがきサイズです。議会議員、行政関係者の方々などに幅広くご活用いただければと考えております。

価格は1冊 500 円（送料別）、5,000 円以上のご注文で送料は無料となります。メール、お電話でのお申込み/お問い合わせ先は次のとおりです。

E-mail:info@japan-a-academy.jp
電話番号：01655-4-2595（平日 9～17 時）
FAX：01655-4-2596

【編集後記】 今回の会報誌は、会員セミナーとフォーラム「アジアと北海道のつきあい方パートⅦ」を中心に編集させていただきました。編集作業や掲載写真のご提供など、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。今後に向けては、会員の皆様方からのご投稿を掲載するなど、幅広い内容で誌面を構成してまいりたいと考えておりますので何卒よろしくお願いいたします。（K・S）